

原行こそうたて見にくけれ、こと人のやうにどきやうしうたうたひなどもせず、けすさまじな  
どそしる、さらにこれかれに物いひなどもせず、女はめはたてさまにつき、眉はひたひにおひか  
かり、はなはよこさまにありとも、たゞ口つきあいぎやうづきを、とがひのしたくびなどをか  
げにて、こゑにくからざらん人なんおもはしかるべき、とはいひながら、猶かほのいとにくげな  
るは心うしとのみの給へば、まいておとがひほそくあいぎやうおくれたらん人は、あいなうか  
たきにして御前にさへあしうけいする、

〔源平盛衰記〕<sup>五</sup>成親已下被召捕事

入道殿モ是程ハ知給タルラメ、去バイハント思ヒツ、休ヨ語ラント云ケレバ、栲木ヨリ下シテ、  
硯紙取寄テ聞之、西光有ノ儘ニゾ云ケル、執事別當新大納言殿、院宣トテ催レシカバ、院中ニ被召  
仕身トシテ、不叶ト申ベキニアラテバ、平家一門打失テ、西光モ世ニアラント思テ與シテ侍キ、院  
宣ノ趣キ誰カ可奉背トテ、始ヨリ終マデ白狀四五枚ニ記シテ、判形セサセテ後、高俊西光法師ガ  
頭ヲ踏テ口ヲ割、重テ誠置テケリ、

〔新猿樂記〕十四御許夫、不調白物之第一也、<sup>中</sup>但十四御許一人、翫之愛之、聊無所憚、件女見姿、頂平  
口甚廣、侏儒踞頗小、面色常青、眉黛以赤陰、相互和合、神所媒夫妻也、

〔松屋筆記〕<sup>四十</sup>口は禍の門

實語教に、口是禍之門とあり、家語に、多言多敗、多事多患と見え、言行録富弼傳に、晁氏客語劉器之  
云、富鄭公年八十、書坐屏云、守口如瓶、防意如城とも有、路史後紀五ノ十六丁ウ、

〔太閤記〕秀吉初て普請奉行の事

或時清洲の城郭、堀百間計崩れしかば、大名小名等に急ぎ掛直し可申旨、被仰付しか共、事行ず、<sup>中</sup>  
略 秀吉千悔し此節は高壘深塹すべき時也、<sup>中</sup>如此延々に掛る事、招禍に似たり、危事かなとつ